トマス・モアの教育思想研究序説

大川 なつか [a]

[a] 湘北短期大学保育学科

【抄録】

本稿では、トマス・モアの家庭教育を考察する上で、あまり注目されることのなかった二つの資料を基に、幼年期の子どもに対する教育観や思いを明らかにする。これまでの研究では、主として青年期の子どもに対するモアの教育思想が明らかにされてきた。そこでまず、エラスムスをはじめとするキリスト教的人文主義者との関わりを中心にモアの生涯を概観する。次に、モアがどのような著作を、特に教育的論考を残したのか整理する。最後に、ラテン文法書と英語韻文詩を検討する。

【キーワード】

トマス・モア、人文主義、教育思想

はじめに

イギリス・テューダー期に活躍した人文主義者トマス・モア (Thomas More, 1477 ? -1535) は、「羊が人間を喰らう」というくだりで有名な『ユートピア』(*Utopia*, 1516) の著者として知られている。彼は、当時の社会の在り方を風刺する著述家という一面をもちながら、法学を修めた法律家であり、国会議員となって大法官（世俗の公職最高位で首相にあたる）にまで上り詰めた政治家であり、ヘンリー 8 世 (Henry VIII, 1491-1547) の離婚問題に身を賭して異を唱え、最後には処刑された熱心なカトリック信者でもあった。

モアの教育思想は「理想の教育による理想社会の樹立を追求したユートピア文学的教育論」[(1)] とされるように、先行研究の多くは主著である『ユートピア』を中心に検討されてきた。そうした中、澤田昭夫は『ユートピア』だけでなく、『リチャード 3 世』、『ティンダルの反駁』、『慰めの対話』など含めて広く扱うべきだとしつつも、女子教育を含めた家庭教育を明らかにするために、子どもたち宛ての書簡、家庭教師宛ての書簡、エピグラム、補足的にステイプルトン (Thomas Stapleton, 1535-1598)、ローパー (William Roper,1495?-1578)、ハープスフィールド (Nicholas Harpsfield, 1519-1575) らによるモア伝やエラスムス書簡などに絞って論じている [(2)]。また、石井美樹子が『イギリス・ルネサンスの女たち』において、やはりローパーやハープスフィールドなどの資料を基に、モアの家庭教育、とりわけモア家の女子教育について丁寧に述べている [(3)]。

本稿では、モアの家庭教育を知る上で、これま

＜連絡先＞

大川 なつか　n-okawa@shohoku.ac.jp

でほとんど扱われることのなかった資料にはどのようなものがあるのか、またそれらに着目することによって、どのようなことが明らかになるのか、新たな可能性を探っていきたい。そこで、まずエラスムスをはじめとするキリスト教的人文主義者との関わりを中心にモアの生涯を概観する。次に、モアがどのような著作を、特に教育的論考を残したのか整理し、最後に、これまで注目されることのなかった二つの資料を基にモアの教育思想の一端を明らかにしたい。

1．モアの生涯―エラスムスとの交流を中心として

1478 年生まれ [4] のモアは、ロンドン有数のセント・アンソニーズ・スクールのニコラス・ホルト (Nicholas Holt, 生没年不詳) の下でラテン語教育を受ける。その後、ジェントリ階級の慣習にしたがって、書生 (page) としてカンタベリー大司教ジョン・モートン (John Morton, 1420-1500) の家に預けられ、礼儀作法や教養を身に付けた。14 歳からの 2 年間は、モアの類まれな才能を認めたモートン卿の勧めで、オックスフォード大学に進む (1492-1494)。学生生活は他の学生同様に質素で、朝 5 時から 6 時に礼拝、6 時から 10 時まで勉強、昼食をはさみ、夕方 5 時まで勉強、夕食後は 9 時から 10 時頃まで再び勉強という日々だった。この頃のオックスフォードには、イギリスに初めてギリシア語研究を紹介したグロシン (William Grocyn, 1446-1519) やラティマー (William Latimer, 1467 頃 -1545) がいたが、モアがギリシア語を習得したのは大学を出てからのことである。青年期の彼は、ギリシア語、ラテン語、フランス語、音楽、幾何学を学び、多くの歴史書を読み、ヴィオラやフルート演奏も嗜んだ。

しかしながら 1494 年 (17 歳) 頃、実父の方針にしたがってロンドンに戻り、法学院で法学を学ぶことになる。有力な中産階層にとって、大学で将来役に立つか分からない人文学を学ぶよりは、高額な学費を払ってでも実学的な法律を習得する方が重要だった。

1500 年から 1504 年にかけてモアは、カルトジオ会修道院に住みながら法学か聖職の道に進むか迷っていた。この頃、コレット (John Colet, 1467-1519) を始めとする人文主義者らとの交流を深め、グロシンやリナカー (Thomas Linacre, 1460-1524) からギリシア語を学び、神学研究にも熱心に取り組むようになる。1504 年にはロンドンの聖ロレンス教会でアウグスティヌスの「神の国」に関する公開講義も行い、同年のコレット宛ての書簡では、コレットの説教を称賛すると共に、グロシンを「人生の指導者」、リナカーを「学びの師」、リリー (William Lily, 1467-1522) を「最も信愛なる仲間」と呼んでいる [5]。

結局のところモアは法廷弁護士となり、その才能は法曹界や公職においても発揮されることとなった。1504 年および 1523 年に国会議員として選出され、1510 年から 1519 年はロンドンの州副長官、法学院の助教授および執行部、1515 年にはフランドル行きの外交官（派遣中にユートピアの構想を練り始めた）、やがて宮廷に仕えるようになる。私生活においては 1505 年にジェイン・コルト (Jane Colt, 1488-1511) と最初の結婚をし、4 人の子どもが生まれ、エラスムス (Desiderius Erasmus, 1466-1536) のよく知るところとなった。

モアとエラスムスが最初に出会ったのは、エラスムスが 1499 年に初めてイギリスを訪問した時になる。二人はすぐに打ち解け、友情は終生変わることはなかった。Schoeckand によれば、モアが残した初期の人文主義的作品は、ルキアノスの翻訳のように、エラスムスとの密接なコラボレーションの結果であり、『ユートピア』や『リチャー

ドIII』には、エラスムスの古典や教育に対する考え方が映し出されている。逆に、『キリスト教兵士必携』も含めたエラスムスの作品にはモアの影響が読み取れる。またモアの翻訳書『ピコ伝』は、1500年から1516年に行われた研究の成果であり、1515年から1519年のドルプ宛て、オックスフォード大学宛て、バットマンソン宛ての書簡は、エラスムスと彼の研究に対する姿勢を擁護するための素晴らしい書簡である、と[6]。1511年、最初の妻を亡くしてまもなくアリス・ミドルトン(Alice Middleton, 1474-1546か1551)と再婚した。この年エラスムスは、モア宅に滞在し、モアの名前から語呂合わせした『痴愚神礼賛』を改訂している。またエラスムスの『言葉と内容の豊かさについて』の中で示された称賛文例の多くにはモアの名前が加えられ、1515年から1517年にかけて交わされた往復書簡には、『ユートピア』の構想や出版について触れられている。

1517年春にエラスムスがイギリス訪問を終えると、モアとの付き合い方に変化が生じた。1518年４月末、公職に従事するモアに対しエラスムスは「文学（literature）の影すらなくなった」と不快感を表し、1521年にナイトの称号を与えられた時には、モアの社会的影響力を過大に評価した。それでも、互いに肖像画を送りあい、互いの論敵から援護する著作を発表するなど、会わない時期にも交流は続いた。

モアは、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の執行部を経て、1529年から1532年まで大法官も務めた。1534年の王位継承法に対する宣誓に署名拒否した後は、国王評議会から訴えられ、ロンドン塔に送られる。そこで極めて平穏のうちに信心深い瞑想的作品を残したが、翌年には斬首の刑となり、57年間の生涯を閉じたのである。モアが処刑されたとの知らせを聞いて、エラスムスはショックを受け、深い悲しみに満ちた気持ちを公けにした。

２. モアの教育的著作物

『トマス・モア原典』の「モア著作年表」には、モアがその生涯において残した主な著作リストが以下のように示されている[7]。

1496年(18)～1504年(26)：英語の詩、1499年(21)～1535年(57)：エラスムスを始めとする友人や論敵との往復書簡（英語とラテン語）、1500年頃(22)：ジョン・ホルトのラテン文法書『子どもたちのミルク』に付せられたラテン語韻文詩、1504年(26)：ジョン・コレット宛ての書簡、1505年(27)～1506年(28)：ルキアノスの翻訳（1506年出版）、1496年(18)～1516年(38)：ラテン語の詩（1518年版の『ユートピア』に付される）、1509年(31)：ヘンリ８世即位に際しての戴冠式頌歌、1510年頃(32)：『ピコ伝』、1513年(35)：ブリクシウスに関する警告詩、1513年頃(35)：『リチャード３世伝』（1557年出版）、1515年(37)：マーチン・ドープ宛ての書簡、1516年(38)：『ユートピア』、1517年(39)～1522年(44)：家庭教師ゴネルおよび子どもたち宛ての書簡、1518年(40)～1520年(42)：オックスフォード大学宛ての書簡（1518年）、エドワード・リー宛ての書簡（1519年）、ブリクシウス宛ての書簡（1520年）、1522年頃(44)：『四終論』、1523年(45)：『反ルター論』、1526年(48)：ブーゲンハーゲン宛ての書簡（1568年出版）、1529年(51)6月：『異端についての対話』、1529年(51)9月：『煉獄の霊魂たちの願い』、1531年(53)5月：『異端についての対話』（第２版出版）、1532年(54)3月：『ティンダル論駁』（I-III）、1532年(54)12月：ジョン・フリス宛ての書簡（1533年12月出版）、1533年(55)春：『ティンダル論駁』（IV-VIII）、1533年(55)4月：『弁明』、1533年(55)10月：『セーレムとバイザンスの論駁』、1533年(55)12月：『主の聖餐と題する

有害書への答弁』、1534 年 (56)：『苦難に対する慰めの対話』、『キリスト受難論』、『聖体拝領論』、『慰めの対話』、1534 年 (56) ～ 1535 年 (57)：「誘惑に抗するための神の助けの懇願」「敬虔なる指針」「敬虔なる瞑想」、1535 年 (57)：『キリストの悲しみ』(1565 年出版)、1535 年 (57)7 月：「(死を前にした) 敬虔なる祈り」

加えて、『トマス・モア原典』には「モアの教育的著作」として、次の 6 点が挙げられている [(8)]。

1 つ目は、子どもたちの家庭教師ウィリアム・ゴネル (William Gonell, 1485?-1560) に宛てた書簡である。これは、1518 年、公職に忙しいモアがゴネルに返信する形で宮廷から出されたものである。その中には「あなたの手紙から子どもたちに対するあなたの献身的な働きぶり、子どもたちの手紙からあなたの精励ぶりが窺えます」とあり、家長の代わりに教育を担う家庭教師に対して全幅の信頼を寄せているのが分かる。その上で、「私は王のどのような宝よりも、徳と結びついた学問を好みます」とし、子ども達に真に与えてもらいたい教育とは、知と徳が結合しているものでなければならない、としている。

2 つ目は、1521 年と 1522 年に宮廷にいるモアから子どもたちに宛てられた 2 つの書簡である。1521 年のものは、「学校の皆様へ」との挨拶文から始まっており、モアの実子のみならず養女も含めた、共に家庭教育を受ける「生徒」に向けられたものとなっている。そして「知識 (knowledge) に対するあなた方の熱意は、血のつながり以上にあなた方と私をしっかりと結びつけます」とあるように、人間と人間を結びつけるものは、天文学をはじめとする教養、学問を大切にする姿勢であるとし、学識をひけらかして地に落ちるのではなく、天に向かって魂を高めることを忘れてはならない、と述べている。

1522 年の書簡は、優しく愛情にあふれた言葉で古典語の学習方法をより具体的に示しながら、勉学を怠らないように子どもたちを励ましているものとなっている。モアは子どもたちから届く手紙を毎日楽しみにしているとし、どのような内容でも構わないからよく考え、まずは英語で文面を書き、それをラテン語に訳し直し、文法上の誤りを確認するように、と教示している。中でも年下のジョンのものは、苦労しながらも一生懸命に書かれた痕跡が分かり、最も父親を喜ばせている、と述べ、早熟な姉たちに比べてゆっくりと成長する弟のひたむきさを受け止め、温かい眼差しが向けられていることが分かる。

3 つ目は、1518 年にオックスフォード大学の執行部に宛てた書簡である。この頃、同大学では「新学問」(New Learning) と言われるギリシア研究に対する機運の高まりと共に、そうした動きを警戒するグループ「トロイ人」が存在し、両者は反目していた。モアは書簡の中で古典作品を扱う人文主義教育には、世俗的側面があるものの、徳ある魂を鍛錬することには間違いないとその正当性を主張し、理解を求めている。

4 つ目は「良心と誠実さ」(Conscience and Integrity) に関する資料である。これは、モアがこれらの言葉を使用した断片的諸文書のことを指す。編者によれば、モアが integrity という英語を使用した最初の著述家であり、これらの言葉を用いて人間のあるべき姿を生涯訴え続けた、とある [(9)]。これらの資料を紐解くことで、モアの求めた理想的人間像、すなわち彼の教育が目指すところを明らかにすることができると、編者は捉えたようだ。具体的な資料の一つとしては、例えば、家庭教師に宛てた書簡の抜粋で、「彼らの教育的努力の成果はすべて、神の証と良心にあるべきです。このように、彼らの心の内は静かで平和であり、この世の称賛によってかき乱されることはなく、また学問を嘲笑する無学の者の愚行に刺され

ることもありません」等がある。

5つ目は、「誇り」(On pride) に関する資料である。こちらも、編者によれば、『ユートピア』にも見られるように、「誇り」はモアにとって重要なテーマだったとし、どのような意味で使用していたのかを知ることは、モアの教育思想を明らかにする上で必要だとしている。これらの中には、1534年に投獄中に書いた『苦難に対する慰めの対話』や『キリスト受難論』が含まれている。

6つ目は、1521年にエラスムスがビュデ (Guillaume Budé, 1468-1540) に宛てた書簡である。この中でエラスムスは、モアが実子養女問わず、男女の別なく、子どもの配偶者も含めた親族全てに対して良き作品をもって教育することに心を配っていることに注目し、このことは新しい習慣として世に広まり、実を結ぶであろうとし、モアが家庭で行っている新しい教育実践について伝えている。

このように、モアの教育思想を知る上では『ユートピア』以外にも多くの資料を検討していく必要があることが分かる。特にここで紹介された、モアによる家庭教師宛ての書簡、子どもたち宛ての書簡、エラスムスによるビュデ宛ての書簡は欠かすことのできない資料であろう。これらにより、モアが自身の家庭においてどのような教育を理想としていたのか、また実際にどのような教育を行っていたのか窺い知ることができる。また、「良心」「誠実さ」「誇り」などの言葉に着目した諸資料についても、モアの信仰観や思想に迫る上で興味深い。

(図1)(バーゼル美術館所蔵。1526年秋に小ハンス・ホルバインが描いたモア家の肖像。モア自身が書いたと思われる人物名と年齢がラテン語で記されている。左から、エリザベス・ダウンシー;モアの娘21歳、マーガレット・ギグス;クレメントの妻、娘たちの勉強仲間22歳、ジョン・モア;父76歳、アン・クレサクル;ジョンの婚約者15歳、トマス・モア;50歳、ジョン・モア;息子19歳、ヘンリ・パテンソン;トマス・モアの道化師40歳、セシリー・ヘロン;娘20歳、マーガレット・ローパー;娘22歳、アリス:妻57歳)

３. モアの家庭教育

モアは 1505 年に最初の妻と結婚し、マーガレット (Margaret, 1505-1544)、エリザベス (Elizabeth, 1506-1564)、シスリー (Cicely, 1507-?)、ジョン (John, 1509-1547) の 4 人の子どもをもうけ、1510 年には自宅を「学校」(schola) と称してホームスクーリングを開始する。翌年には最初の妻を亡くし二番目の妻を迎えるが、二人の間に子どもはなく、妻の連れ子アリスをはじめ、長女の乳母の子マーガレット・ギグス（Margaret Giggs, 1508-1570）、モアの姉の子フランセス・スタヴァートン（Staverton, 生没年不詳）、アン・クレサクル（Anne Cresacre, 1511-1577）が養女となり、実子同様の家庭教育を受けた。

やがて、その対象は孫世代にまで広がり、長女とウィリアム・ローパー (William Roper, 1496?-1578) との間に生まれた子ども 4 人、二女のエリザベスとウィリアム・ダウンシー (William Dauncey, 1506-1564) との子ども 7 人、三女セシリーとジャイルズ・ヘロン（Giles Heron, 1504-1540）との子ども 3 人、長男のジョンとクレサクルとの子ども 6 人、養女マーガレット・ギグスと夫ジョン・クレメント (John Clement, 1500?-1572) との間の子どもも加わる。最終的にモアの家庭には連れ子アリスの夫ジェイルズ・アリントン (Giles Alington, 生没年不詳)、モアの秘書ジョン・ハリス (John Harris, 生没年不詳)、モア家の道化師、召使がファミリーの一員として共同生活を送った。

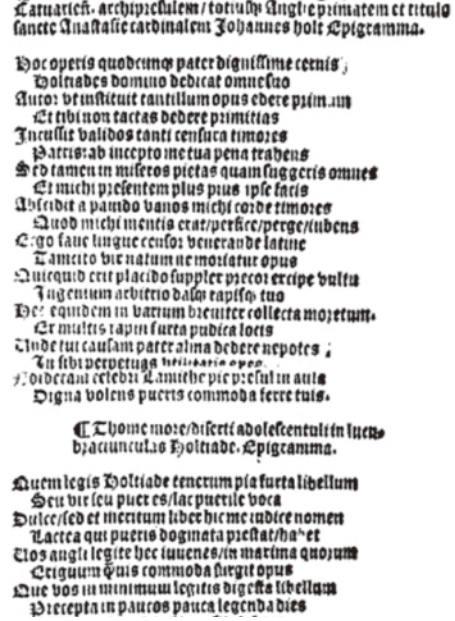
またモアの「学校」に迎え入れられた家庭教師は、聖パウロ学校卒業後、オックスフォードに学び、ギリシア研究者で医師のジョン・クレメント、エラスムスの写字生でケンブリッジ大学に学んだウィリアム・ゴネル、ドイツ人で宮廷付の天文学者のニコラス・クラッツアー (Nicholas Kratzer,1487?-1550)、スペインの人文主義者ヴィヴェス (Juan Luis Vives, 1492-1540)、オックスフォードを出たリチャード・ハード (Richard Hyrde, ?-1528)、同じくオックスフォードを出たロジャー・ドルー (Roger Drew, Drewe?Drewys, 生没年不詳：1521 年の子どもたち宛ての書簡にその名前が出ている) の6人だった。

モアは、家長として妻たちにも自ら教育を行い、教育方針を定めて家庭教師を次々と雇い、彼らと共に愛情深く子どもたちの教育に当たった。とりわけ、長女マーガレットはモアの期待に応え、当時の女性には珍しく人文主義者として成長し、優れた著作を世に残した。なお長男ジョンは、途中からコレットが設立した聖パウロ学校 (St Paul's School) に入学したようだ、とも言われている [10]。

ところで、モアの「学校」が 1510 年から始まったとすると、長女が 5 歳の時ということになるが、子どもたちの幼少期における家庭教育についてはほとんど知られていない。多くの先行研究が家庭教育を知る手掛かりの一つとして 1521 年の子どもたちに宛てた書簡を取り上げているが、それは長女が 16 歳の時のものである。子どもたちはすでに英語とラテン語で文章を書けるまでに成長し、二重翻訳法と呼ばれる方法で修辞教育を受けていた。それ以前のラテン語学習はどのようになされていたのだろうか。また、ローパー [11] やステイプルトン [12] のモア伝にも、子どもたちが小さかった頃の様子は触れられていない。幼い子どもたちの教育、幼少期の子どもに対するモアの思いはどのようなものだったのだろうか。

そこで、本稿ではモアの著作一覧には入っているものの、教育的論考としては取り上げられることなかった二つの資料に注目したい。一つ目は、ジョン・ホルト (John Holt, ?-1504) のラテン文法書『子どもたちのミルク』(*Lac Puerorum.M.holti Mylke for Chyldren*)[13] であり（**図２**）、そこには、

（図２）

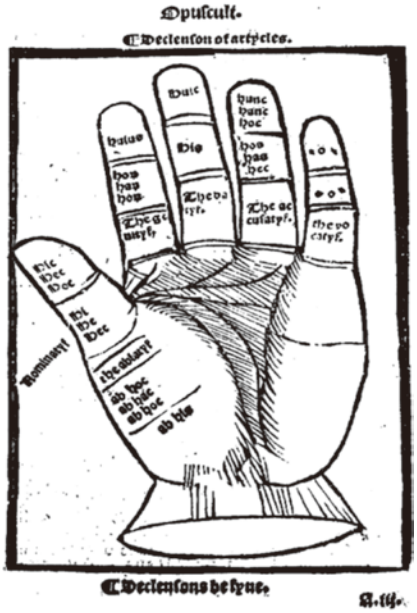


（図３）

モアの手によるラテン語韻文詩が序文と結びに付けられている (**図３**)。

著者ホルトは、オックスフォード大学モードリン・コレッジ出身で、教師として名を知られるところとなり、ヘンリー８世の幼少期に教育係も務め、モアの親友でもあった。1486 年から 1496 年の間にイングランドで出版された最も初期のこの文法書の登場によって、従来の難解で暗記中心型の文法教育は大きな変化を遂げた。そこには、幼い子どもの興味関心を引くよう語形変化表が単純化され、覚えやすいような工夫がなされていた（**図４**）。手のひらの形をし、５本の指には５つの格が付けられ、親指の付け根には奪格が示されている語形変化表は、「効果的に子どもたちの心に印象を与える」[14] ことが出来、幼い子どもにとって適した教材だった。

視覚的にも子どもを惹きつけ、少しでも理解を容易にしようとする新しい文法書の登場をモアは歓迎した。タイトルの一部になっている「ミルク」は、「コリントへの信徒への手紙１」第３章の２「私



（図４）

はあなたがたに乳を飲ませて、固い食物を与えませんでした。まだ固い物を口にすることが出来なかったからです」にあるように、「幼い子どもにとって適切な食べ物」を意味する[15]。大人とは異なる子どもならではの特性を認め、成長するために必要なものをいかに無理なく吸収し、身に付けていくことができるかを表現している。

モアの韻文詩は、初版は現存しないものの 1500 年版で確認することができる。この時期はカルトジオ修道院時代にあたり、エラスムスをはじめとする多くの人文主義者と盛んに交流をしていた時期と重なる。また 10 年後の 1510 年版でも韻文詩を確認できることから、家庭教育において自身の子どもに向けてこの文法書を使用していたと考えることが妥当であろう。コレット、リナカー、リリーも新しいタイプの文法書を作成したように、聖書も含めた古典的作品を原典から読み解く力をいかに付けさせるか、言葉の教育を改革することは、キリスト教的人文主義者にとって共通の課題だった。ラテン語の初歩的学習は、学識ある信仰への基礎であり、その意味ではモアもまた、子どもらしい学びを大切にしながら、「良き学問」(*bonae literae*) を身に付けさせようとしたことが分かる。

二つ目の資料は、ナイン・ページェンツ（Nine Pagents；９つの仮装行列）というモアが英語で書いた韻文詩で、幼少期の子どもに対するモアの思いを知る上で重要な資料だと言える。これは、モアが青年期に「気晴らしのために」[16] 英語で書いた４つの詩の一つで、カルトジオ時代の 1503 年、父親の家にあるナイン・ページェンツが描かれた豪華な絵布に書き加えたものである。前章で紹介した著作一覧のうち、冒頭に挙げた「1496 年 (18) ～ 1504 年 (26)：英語の詩」にあたる。

詩に登場する最初の仮装行列は「幼少期」、２番目は「成年期」、３番目は「キューピッド」、４番目が「老年期」、５番目が「死」、６番目が「名声」、７番目が「時間」、８番目が「永遠」、そして最後の９番目が「詩人」となっている。ここで注目したいのは幼少期に対する描写で、モアは次のように表現している[17]。

I am called childhood : in play all my mynde,
To cast a coyte, a cockstele, and a ball.

私の名前は子ども時代。私の心は遊びでいっぱい。
平石、棒切れ、ボール投げ。

詩に出てくる「コックステイル」とは、地中に体だけ埋まっている生きた鶏の首をめがけて短くて太い棒切れを投げる残酷な遊戯のことである。モアのイメージする幼少時代は、思い切り遊びに興じる活動的で子どもらしさに溢れた世界だ。そこには原罪を背負い鞭で打たれおびえる子ども像はない。

なお、長女が 11 歳の時に出版された『ユートピア』には食事中の子どもたちの様子が書かれている[18]。食事時、５歳に満たない子どもは乳母部屋で世話をしてもらうが、それより年上の子どもは大人が食事をしている部屋に入り、給仕の手伝いができる子はする。幼くできない子どもは黙って立っている。いずれにしても彼らは大人から食事を分け与えられながら、そこで交わされる気の利いた会話や朗読、大人の重厚で恭しいふるまいを見聞きして育つ。大人もまた、子どもたちに会話を促し、喜んでこれに聞き入る。このように身に付けるべき礼儀作法を日々の生活習慣の中から自然と学ぶことがあるべき姿として描かれている。

ところでイギリスでは、リドゲイト (John Lydgate, 1370 ？ -1451) の『食卓に立つ少年』(*Stans puer ad mensam,* Caxton,1476) にあるように、エラスムスの礼儀作法論を待つことなく、15 世紀には礼儀作法に関する書物が多く存在していた。社

会に台頭する有力市民階級にとって、マナーを身に付けることは必須だった。モア自身は慣習にしたがって親元を離れ奉公先で礼儀作法を学んだが、理想としては温かく楽しい家庭的雰囲気の中で身に付けるべきものとしていたことが分かる。

おわりに

これまであまり注目されることのなかった資料を取り上げることによって、より低年齢の子どもを対象としたモアの家庭教育の一端が明らかとなった。

新しい文法書に付されたラテン語の韻文詩は、モアがともすると人文主義者たちと交流を深める前から、言葉の教育およびその教育方法に強い関心を持っていたことが分かる。モアが求めていたのは、教師が口述し、それを子どもが何度も復唱するという伝統的な方法ではなく、幼い子どもでも理解しすいよう、興味が持てるように、身近な事物を視覚化し、心に訴える方法だった。そうした考えは、同じく教育改革を目指す人文主義者に影響を与え、また彼らとの思想的交流を通じて確信に変わっていったであろう。

また、同じく若い時に作成した英語の韻文詩ナイン・ページェントは、モアの子ども観を良く映し出している。モアにとって幼い子どもは、無邪気で好奇心に溢れ、愛情をかける対象であった。厳しく罰するのではなく、温かくユーモアに富んだ家庭の中で、信仰と学識を備えた人間に育ってもらいたいと願ったのである。その意味で家庭教育を担う者として母親にも責任があり、母親、ひいては女性への教育を必要としたと言える。

加えて教育思想史的観点から言えば、モアがエラスムスに与えた影響は大きい。エラスムスが初めてイギリスに来た時、モアと共にグリニッジで若きヘンリー（後のヘンリー８世）と会っている。この時、自身には相応のふるまいが身に付いていなかったことをエラスムスは悔やんでいた。またモア家に滞在する機会を得たことで、エラスムス自身が味わうことのなかった温かみ溢れる家庭の様子を垣間見ることができた。モア家の子どもたちは、愛情深い親の下で、日々の習慣の中で礼儀作法を自然と身に付け、意欲を大切にされながら勉強に励み、そして遊ぶ時は思いっきり遊んでいたであろう。家庭教育論におけるモアのエラスムスへの影響は、従来の研究で言われているような女子教育論だけでなく、礼儀作法論、学習方法論なども含め今後さらに検討していく必要がある。

【註】

(1) 平野智美・高祖敏明著「ルネサンス後期の教育思想」（上智大学中世思想研究所編『ルネサンス教育思想』（下）昭和 61 年所収）p.16。

(2) 澤田昭夫著「モア」（上智大学中世思想研究所編『ルネサンスの教育思想』（上）昭和 60 年所収）p.381。

(3) 石井美樹子著『イギリス・ルネサンスの女たち』中公新書、1997 年、pp.87-127。

(4) モアの生涯を概観するにあたっては R.J.Schoeckand PGB, ‘ Thomas More ’, in edit. by Peter G.Bietenholz, *Comtemporaries of Erasmus*, Vol.2, Univ.of Toronto Press,1986, pp.456-459. を底本として適宜訳出したものに、『トマス・モアの生涯』（R.W. チェンバーズ著、門間都喜朗訳、大和書房、1982 年）なども参考にしながら付け加えた。なお、*Comtemporaries* では、モアの誕生年を 1477 年としているが、現在の研究では 1478 年が支持されているため修正した。

(5) T.E.Bridgett, *Life and Writings of Sir Thomas More*, Burns and Oats, 1891, pp.46-48.

(6) R.J.Schoeckand PGB, in *op.cit.*, p.456.

(7) Gerard B.Wegemer, Stephen W.Smith, *A Thomas More Source Book*, Catholic Univ. of America Press, 2004, pp.364-365. なお、リストにある（　）内の数字は、モアの年齢で筆者が付け加えた。

(8) *ibid.*, pp.197-230.

(9) *ibid.*, p.212.

(10) Michael McDonnell, *The Annals of St Paul's*

School , Privately printed for the Governors, 1959, pp.61-62.
(11) William Roper, *The Life of Sir Thomas More*, Burns and Oates, 1905, p.27. ここには、モアが家族と共に日々の祈りを行っている様子が書かれている。
(12) Thomas Stapleton,trans. by Philip E.Hallett,edit. by Katherine Stearns and Emma Curtis, *The Life and Illusrious Martyrdom of Sir Thomas More*, CTMS Publishers at the University of Dallas, 2020, p.52. ここには、家庭教師から教育を受けるには「十分に成長している」子どもとの表現がある。
(13) *Lac Puerorum.M.holti Mylke for Chyldren*, 1510, Early English Books Online, Copyright 2019 ProQuest LLC Images reproduced by courtesy of British Library. 国立国会図書館蔵。
(14) J.H.Lupton, *A Life of John Colet*, Burt Franklin Reprints, 1974, p.24.
(15) *Oxford English Dictionary*, IX, p.769.
(16) R.W. チェンバーズ著、前掲書、pp.72-74.
(17) J.H.Lupton, *op.cit.*, p.174.
(18) トマス・モア著、澤田昭夫訳『改版ユートピア』中央公論社、1993 年、pp.148-150.

トマス・モアの教育思想研究序説

Introduction to the Study of Thomas More's Educational Thought

Natsuka OKAWA

【abstract】

This paper clarifies Thomas More's educational views on childhood, based on two materials that have not received much attention when dealing with More's home education. Previous studies have revealed More's educational thought mainly on adolescence. First, More's life, focusing on his involvement with Christian humanists such as Erasmus, is summarised. Next, the educational writings More left behind are shown. Finally, two materials, *Lac puerorum* and 'Nine Pagents', are considered.

【key words】

Thomas More, Humanism, Education